

(案)
契 約 書

地方独立行政法人広島県立病院機構 県立安芸津病院を甲とし、を乙として、甲
と乙は、次のとおり物品の売買契約を締結した。

(目的)

第1条 乙は、甲の指示に基づき、次の表に定めるとおり、物品を納入することを約し、甲は、これを承諾した。

1 品 名	重油
2 規 格	第1種(A)2号 J I S K2205
3 予 定 数 量	89,000 リットル
4 単 価 金 額	1 リットル 金 円 (消費税及び地方消費税相当額を除く。)
5 契 約 期 間	令和7年7月1日から令和7年9月30日まで
6 納 入 場 所	東広島市安芸津町三津 4388 番地 県立安芸津病院

(契約単価)

第2条 契約単価は、契約期間中原則として変更しないものとする。ただし、市場価格の著しい変動があった場合には、甲と乙が協議して契約単価を改定する。(特約事項、別紙のとおり)

(契約保証金)

第3条 甲は、乙に対して契約保証金の納付を免除する。

(納入の指示)

第4条 甲は、乙に対して物品の納入を指示するときは、別紙納入指示書をもって行うものとする。

2 乙は、前項の物品納入指示書に記載された数量の物品をその納期までに甲に納入するものとする。

(納品、検査等)

第5条 乙は、前条第1項の指示により、物品を納入しようとするときは、甲の立会いのもとに納入物品が種類、規格又は数量に関してこの契約の内容に適合しているかについて検査を受けなければならない。この場合において、貯油槽タンクに搬入するものについては、次によるものとする。

- (1) 検定を受けたローリー車により運搬した積み荷は、製油会社の封印をすること。
- (2) 製油会社の発行する当該納入物品の数量証明及び納入物品に対する J I S - K 2 2 0 5 の 4 号に係る試験表をその都度、甲に提出すること。
- (3) 給油する際は、結合金具を付けること。

2 前項の場合において、納入物品が検査に合格しないときは、現品を取り替え、又は甲の指示に基づく措置をとるものとし、これに要する一切の費用は乙の負担とする。

(試験検査)

第6条 甲は、必要と認めるときは、乙の立会いのもとに納入物品から必要量を採取し、規格試験に付することができるものとし、これに要する一切の費用は乙の負担とする。

(履行遅滞による損害賠償)

第7条 乙は、自己の責めに帰すべき理由によって、納期までに物品を完納しないときは、遅延日数に応じ、未納数量分の物品の代価につき年 14.5 パーセント (ただし、各年の延滞金特例基準割合 (平均貸付割合 (租税特別措置法 (昭和 32 年法律第 26 号) 第 93 条第 2 項に規定する平均貸付割合をいう。)) に年 1 パーセントの割合を加算した割合をいう。以下同じ。)) が年 7.25 パーセントの割合に満たない場合には、その年中においては、その年における延滞金特例基準割合に年 7.25 パーセントの割合を加算した割合とする。) の割合で算定した金額を履行遅滞による損害賠償金として甲に支払うものとする。

(契約の履行)

第8条 乙が行う契約の履行は、第5条の検査に合格した後、当該物品を納入場所に納入したときをもって完了するものとする。

(危険負担)

第9条 契約履行完了前の物品の滅失、損傷その他の損害については、乙の負担とする。ただし、甲の責めに帰すべき事由によって物品の滅失、損傷その他の損害が生じたときは、この限りでない。

（契約内容の変更など）

第10条 甲は、必要があるときは、納入物品の内容を変更させ、又は納入の中止をさせることができるものとする。

（権利義務の譲渡などの禁止）

第11条 乙は、第三者にこの契約の履行を委託し、又は契約による権利を譲渡し、若しくは義務を引き受けさせてはならない。ただし、甲の承諾がある場合は、この限りでない。

（催告解除）

第12条 甲は、乙がその債務を履行しない場合において、相当の期間を定めてその履行の催告をし、その期間内に履行がないときは、この契約を解除することができる。ただし、その期間を経過したときにおける債務の不履行がこの契約及び取引上の社会通念に照らして軽微であるときは、この限りでない。

2 債務の不履行が甲の責めに帰すべき事由によるものであるときは、甲は、前項の規定による契約の解除をすることができない。

3 第1項の規定により契約が解除された場合においては、乙は、第1条表中の「3 予定数量」に記載の数量に「4 単価金額」に記載の金額を掛けた額の10分の1に相当する額を違約金として甲の指定する期限までに支払わなければならない。ただし、解除の原因がこの契約及び取引上の社会通念に照らして乙の責めに帰することができない事由によるものであるときはこの限りでない。

4 甲は、第1項の規定による契約の解除に伴い、損害を被ったときは、前項の違約金の額を超える損害が甲に発生した場合、甲は、乙に対して、その超過額の支払を請求することができる。

5 甲は、本条各項の規定により本契約を解除した場合、それにより乙に損害が生じても、何ら賠償責任を負わない。

（無催告解除）

第13条 甲は、次の各号のいずれかに該当するときは、前条の催告をすることなく、直ちにこの契約の全部を解除することができる。

(1) 債務の全部が履行不能であるとき。

(2) 乙がその債務の全部の履行を拒絶する意思を明確に表示したとき。

(3) 債務の一部の履行が不能である場合又は乙がその債務の一部の履行を拒絶する意思を明確に表示した場合において、残存する部分のみでは契約をした目的を達することができないとき。

(4) 契約の性質又は当事者の意思表示により、特定の日時又は一定の期間内に履行をしなければ契約をした目的を達することができない場合において、乙が履行をしないでその時期を経過したとき。

(5) 前各号に掲げる場合のほか、乙がその債務を履行せず、甲が前条の催告をしても契約をした目的を達するのに足りる履行がされる見込みがないことが明らかであるとき。

2 甲は、次の各号のいずれかに該当するときは、前条の催告をすることなく、直ちにこの契約の一部を解除することができる。

(1) 債務の一部が履行不能であるとき。

(2) 乙がその債務の一部の履行を拒絶する意思を明確に表示したとき。

3 債務の不履行が甲の責めに帰すべき事由によるものであるときは、甲は、前2項の規定による契約の解除をすることができない。

4 前条第3項から第5項までの規定は、第1項及び第2項の規定により契約を解除した場合につ

いて準用する。

第 14 条 甲は、次の各号のいずれかに該当するときは、催告をすることなく、この契約を解除することができる。

- (1) 乙が、私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律（昭和 22 年法律第 54 号。以下「独占禁止法」という。）第 49 条に規定する排除措置命令（以下この号及び次項において単に「排除措置命令」という。）を受け、当該排除措置命令が確定したとき。
- (2) 乙が、独占禁止法第 62 条第 1 項に規定する納付命令（以下この号及び次項において単に「納付命令」という。）を受け、当該納付命令が確定したとき。
- (3) 乙（乙が法人の場合にあっては、その役員又は使用人を含む。）が、刑法（明治 40 年法律第 45 号）第 96 条の 6 若しくは第 198 条又は独占禁止法第 89 条第 1 項若しくは第 95 条第 1 項第 1 号の規定による刑に処せられたとき。

2 甲は、排除措置命令又は納付命令が乙でない者に対して行われた場合であって、これらの命令において、この契約に関し乙の独占禁止法第 3 条又は第 8 条第 1 項第 1 号の規定に違反する行為があったとされ、これらの命令が確定したときは、契約を解除することができる。

3 第 12 条第 3 項から第 5 項までの規定は、前 2 項の規定により契約を解除した場合について準用する。

第 15 条 甲は、次の各号のいずれかに該当するときは、催告をすることなく、この契約を解除することができる。

- (1) 乙の役員等（乙が個人である場合にはその者を、乙が法人である場合にはその法人の役員又はその支店若しくは営業所（常時契約を締結する事務所をいう。）を代表する者をいう。以下同じ。）が、集団的に、又は常習的に暴力的不法行為を行うおそれのある組織（以下「暴力団」という。）の関係者（以下「暴力団関係者」という。）であると認められるとき。
- (2) 乙の役員等が、暴力団、暴力団関係者、暴力団関係者が経営若しくは運営に実質的に関与していると認められる法人若しくは組合等又は暴力団若しくは暴力団関係者と非難されるべき関係を有していると認められる法人若しくは組合等を利用するなどしていると認められるとき。
- (3) 乙の役員等が、暴力団、暴力団関係者又は暴力団関係者が経営若しくは運営に実質的に関与していると認められる法人若しくは組合等に対して、資金等を供給し、又は便宜を供与するなど積極的に暴力団の維持運営に協力し、又は関与していると認められるとき。
- (4) 前 3 号のほか、乙の役員等が、暴力団又は暴力団関係者と社会的に非難されるべき関係を有していると認められるとき。
- (5) 乙の経営に暴力団関係者の実質的な関与があると認められるとき。
- (6) 再委託契約その他の契約に当たり、その相手方が前各号のいずれかに該当することを知りながら、当該者と契約を締結したと認められるとき。
- (7) 乙が、第 1 号から第 5 号までのいずれかに該当する者を再委託契約その他の契約の相手方としていた場合（前号に該当する場合を除く。）に、甲が乙に対して当該契約の解除を求め、乙がこれに従わなかったとき。

2 第 12 条第 3 項から第 5 項までの規定は、前項の規定により契約を解除した場合について準用する。

（暴力団等からの不当介入の排除）

第 16 条 乙は、契約の履行に当たり暴力団等から不当介入を受けた場合は、その旨を直ちに甲に報告するとともに、所轄の警察署に届け出なければならない。

- 2 乙は、前項の場合において、甲及び所轄の警察署と協力して不当介入の排除対策を講じなければならない。
- 3 乙は、暴力団等から不当介入による被害を受けた場合は、その旨を直ちに甲へ報告するとともに、被害届を速やかに所轄の警察署に提出しなければならない。

（損害金の予定）

第 17 条 甲は、第 14 条第 1 項及び第 2 項の規定により契約を解除することができる場合においては、契約を解除するか否かにかかわらず、第 1 条表中の「3 予定数量」に記載の数量に「4 単価金額」に記載の金額を掛けた額の 10 分の 2 に相当する金額の損害金を甲が指定する期間内に支払うよう乙に請求するものとする。

- 2 前項の規定は、甲に生じた実際の損害額が同項に定める金額を超える場合において、甲が当該を超える金額を併せて請求することを妨げるものではない。
- 3 前 2 項の規定は、第 5 条第 2 項の規定による検査に合格した後も適用されるものとする。

（代金の支払）

第 18 条 甲は、第 1 条表中の「4 単価金額」に記載の金額に月末締めで集計した毎月の納入数量を乗じて得た金額に消費税及び地方消費税相当額を加算した金額（1 円未満の端数があるときは、これを切り捨てるものとする。）を代金として乙に支払うものとする。

- 2 甲は、乙が契約の履行を完了した後に提出する適法な請求書を受理した日から 30 日以内に代金を支払うものとする。
- 3 甲は、前項の支払期限までに乙に代金を支払わないときは、甲は、乙に支払期限到来の日の翌日から支払をする日までの遅延日数 1 日に応じて、未払の代金につき年 2.5 パーセント（算定対象の期間において適用される政府契約の支払遅延防止等に関する法律（昭和 24 年法律第 256 号）第 8 条第 1 項の規定によって財務大臣が決定した率（以下「支払遅延防止法の率」という。）がこの率と異なる場合は、支払遅延防止法の率）の割合で算定した額の遅延利息を支払うものとする。

（追完請求）

第 19 条 甲は、納入された当該物品が種類、規格又は数量に関してこの契約の内容に適合しないもの（以下「契約不適合」という。）であるときは、乙に対し、甲が指定する方法により当該物品の修補、代替物の引渡し又は不足分の引渡しによる履行の追完を請求することができる。

- 2 前項の契約不適合が甲の責めに帰すべき事由によるものであるときは、甲は、同項の規定による履行の追完の請求をすることができない。

（代金減額請求）

第 20 条 納入された当該物品が契約不適合である場合において、甲が相当の期間を定めて履行の追完の催告をし、その期間内に履行の追完がないときは、甲は、その不適合の程度に応じて代金の減額を請求することができる。

- 2 前項の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当する場合には、甲は、同項の催告をすることなく、直ちに代金の減額を請求することができる。

- (1) 履行の追完が不能であるとき。
- (2) 乙が履行の追完を拒絶する意思を明確に表示したとき。
- (3) 契約の性質又は当事者の意思表示により、特定の日時又は一定の期間内に履行をしなければ契約をした目的を達することができない場合において、乙が履行の追完をしないでその時期を経過したとき。
- (4) 前 3 号に掲げる場合のほか、甲が前項の催告をしても履行の追完を受ける見込みがないことが明らかであるとき。

- 3 第 1 項の契約不適合が甲の責めに帰すべき事由によるものであるときは、甲は、前 2 項の規定による代金の減額を請求することができない。

（担保責任の期間の制限）

第 21 条 納入された当該物品が契約不適合である場合において、甲が当該物品が契約不適合であることを知ったときから 1 年以内にその旨を乙に通知しないときは、甲はその不適合を理由として第 12 条及び第 13 条に規定する契約の解除又は違約金の請求、第 19 条に規定する履行の追

完の請求並びに第 20 条に規定する代金減額請求をすることができない。ただし、乙が納入のときにその不適合を知り、又は重大な過失によって知らなかったときは、この限りでない。

(実地調査など)

第 22 条 甲が、この契約に係る甲の予算執行の適正を期するため必要があると認めた場合は、甲は、乙に対し、乙における当該契約の処理の状況に関する調査への協力を要請することができる。
2 乙は、前項の要請があった場合には、特別な理由がない限り要請に応じるものとし、この契約の終了後も、終了日から5年間は、同様とする。

(費用の負担)

第 23 条 この契約の締結に要する費用及び物品納入に要する費用は、乙の負担とする。

(疑義の解決)

第 24 条 この契約の履行について疑義が生じた場合又はこの契約に定めのない事項で必要がある場合は、甲及び乙が協議して定めるものとする。

(管轄)

第 25 条 この契約に係る訴訟の提起又は調停の申立てについては、広島地方裁判所を第一審の専属的合意管轄裁判所とする。

この契約の締結を証するため、契約書2通を作成し、甲と乙が記名・押印をして、各自その1通を所持する。

令和 年 月 日

甲 広島県東広島市安芸津町三津 4388 番地
地方独立行政法人広島県立病院機構
県立安芸津病院 院長 印

乙

(別紙)

特 約 事 項

契約書第2条ただし書の「市場価格の著しい変動があった場合には、甲と乙が協議して契約単価を改定する。」とは、次のとおりとする。

- 1 一般財団法人建設物価調査会が毎月公表する「物価資料」のA重油（陸上 硫黄分 0.5%以下 荷姿 ローリー 広島地区）の価格（以下「価格」という。）について、契約期間開始月の価格を基準として1円以上の変動があったときは、当該変動額を契約単価に加減し、当該変動のあった月の翌月から契約単価を改定する。

契約単価を改定した後に、次号(3)の価格を基準として、1円以上の変動があったときも同様とする。

- 2 前号の改定については、次のとおりとする。

- (1) 契約期間開始月の価格

「物価資料」2025年7月号により公表された価格

- (2) 毎月の価格及び1円以上の変動があったときの契約単価改定時期

毎月の価格	改定時期
「物価資料」2025年8月号	令和7年8月1日から
「物価資料」2025年9月号	令和7年9月1日から

- (3) 契約単価改定後に基準とする価格

直前の契約単価改定日	基準とする価格
令和6年8月1日の場合	「物価資料」2025年8月号
令和6年9月1日の場合	「物価資料」2025年9月号

- 3 燃料油価格激変緩和対策事業の補助金の再開等により、市場価格の著しい変動があった場合には、甲と乙が別途協議して契約単価を改定する。